

# Iris Murdoch の世界

—*The Bell* の場合—

松 原 恭 子

Iris Murdochは、1954年に *Under the Net* を発表して以来これまでに、十編の長編小説を発表している。*Under the Net* は、同じ頃に発表された John Wain の *Hurry On Down* や Kingsley Amis の *Lucky Jim* と、ある意味で主人公に共通点がみられるところから、彼女も “Angry Young Men”<sup>1)</sup> の一人と目されたのであるが、第二作の *The Flight from the Enchanter* 以後の彼女の作品をみると、彼女が所謂 “Angry Young Men” ではないことは明らかである。小説技法の面よりみると、初期の作品よりも、第五作 *A Severed Head* 以後のものにみるべきものがあるように思われる。即ち、*A Severed Head* では、錯綜する人間関係を精巧な細工物をおもわせる程美事に描きだしているし、第七作の *The Unicorn* は、明らかに Henry James の *The Turn of the Screw* を意識して書いたものであり、第八作の *The Italian Girl* に於て、彼女は綿密な構成をもつ自分の小説技法を完成させているように思われるからである。

Murdoch という作家は、巧みな story-teller である。ある一つの舞台設定ができると、彼女はその中で作中人物の性格を浮彫りにしながら、複雑に入り組んだ人間関係を描きだす。各作中人物の関係は、sodomy, incest, adultery などで錯綜する。いかにも人間関係や筋立てが巧みに仕組まれていて、入念な構成のもとに筋が展開しているので、ある時には、探偵小説を思

1) Kenneth Allsop, *The Angry Decade*, London, Peter Owen Limited, pp. 96—103.

わせるものがある。従って、彼女の小説は、筋だけを追って読んでも結構楽しめるし又面白い。彼女の作品を、玉ねぎの皮むきの面白さと評するむきもあるのは、そのためである。しかし、彼女の作品の面白味は、探偵小説に似た面白さのみにあるのではなく、彼女が巧みな **story-teller** であるとともに、作中人物の創造にも優れていることによるものと思われる。彼女の小説では、女性の創造にも、男性の創造にも成功していることが多い。本稿に於ては、小説技法の面では多少の破綻をみせながらも、魅力ある人物を描きだしているという点に於ては、それ以後のものを凌ぐと思われる 第四作の *The Bell* を取上げて、その点を中心にして彼女の小説の特質を検討してみたい。

この物語は、ある尼僧院にまつわる伝説の鐘を中心に展開している。14世紀ごろ、この尼僧院に忍んで通っていた村の若者が塀から墜落死したため、その相手の修道女が詮議されるが名乗りでるものがなかったため、その尼僧院に呪がかけられる。すると尼僧院の鐘がひとりでに湖に落ちて沈んだ。その後一人の修道女が湖に身を投げて死んだという。それ以後湖から鐘の音がきこえてくると、誰か死ぬと伝えられている。今では、**Imber Court** と呼ばれる **Anglican lay community** が、その尼僧院に附属する形で営まれている。これは、普通の世間での生活に適応できず、かといって世を捨て宗教生活一筋に生きることもできない人々のために、尼僧院と俗世界との中間に存在するものであり、**Michael** を指導者に数人の者が信仰生活を中心にした菜園経営を行っている。

そこに滞在して古文献を研究している学者の **Paul** の許に、家出していた妻 **Dora** が帰ってくる。宗教心をもたない彼女は、**Imber** で暮すことで、一層劣等感がつりその中にとけ込めない。一度は **London** へ逃げだすが、その日の内に思い直して帰ってくる。**Imber** に憧れて **Oxford** 入学前の夏休みを利用してそこで暮している **Toby** から、彼女は湖に半ば泥にうずまって沈んでいる鐘をみつけたという話をきく。彼女はそれが伝説の鐘であると確信して、近く除幕式の行われる新しい鐘と入替えて、皆を驚かそうと企む。真

夜中に、Toby がトラクターを使って奮闘したおかげで、その鐘をひき上げるには成功するが、邪魔が入り入替えるまでには至らない。

除幕式の日、群衆の見守る中を、厳に尼僧院に新しい鐘を運ぶ途中、今度はその鐘が湖に落ちるという事故が起る。それをみて修道女志願の Catherine が精神分裂を起して湖に身を投げようとする。救われた彼女の口から、Michael におもいを寄せていたことがわかる。この鐘の事故は、実は Catherine の兄の Nick の仕業であることがわかる。その直後、Nick は自殺をとげてしまう。この一連の事件が新聞に大きく報道されたこと、直接には、Michael と Toby、又 Nick の間に同性愛めいたことがあったことが明るみにでたことで、この Imber lay community は解散することに決り、人々は夫々落ち着き場所をみつけて散ってゆく。新しい鐘は、湖より引上げられ、そのままそっと尼僧院に取付けられ、やがてその音を響かせるのである。Imber Court の建物は、尼僧院の一部として使用されることに決る。

これが、だいたいこの作品の概略である。除幕式の行われることになっている新しい鐘は、最初第一章に於て Imber へむかう汽車の中での Toby と James の会話の中にでてきてから、除幕式の準備という形で Imber の人達の共通の関心事となり、最後に一人残った Dora にその音がきこえてくることからわかるように、この新しい鐘がこの物語を一つに繋ぐ一本の糸になっている。しかし、この作品の中で重要な役割りを果すのは伝説の鐘であり、これによってこの小説に劇的な効果を与えるのに成功しているわけである。

このような枠組の中で、Murdoch は一体何を描こうとしたのであろうか。彼女の小説に於ては、作品の題名がその主題を象徴するというのが通説のようになっている。*The Bell* までの三作——*The Under the Net*, *The Flight from the Enchanter*, *The Sandcastle*——に於ては、題名は抽象的な概念をあらわす言葉であり、作品の中で何らかの方法でその意味が簡潔に説明されている。ところが *The Bell* の場合には、鐘は plot の展開の上で使われているわけである。尤も、この作品に於ては、Dora の人生に於ける目覚めの過程を伝説の鐘の発見の過程に象徴して描くという技巧的な工夫がみられる

が、“the bell” そのものには意味はないと思われる。<sup>1)</sup> 尼僧院にまつわる鐘の伝説の中にある修道女と修道女志願の Catherine の運命 (Michael への思慕と入水自殺) が重なり合っていること、湖に沈んでいた伝説の鐘が真夜中に音をたてたことが Nick の自殺の前兆になっていることなどにも、技巧的な工夫がみられるが、それらには、わざとらしさはなく、伝説の鐘のもつ効果を高めていると考えられる。ただそれ以後の伝説の鐘の取扱いには難点がある。現実姿をあらわした伝説の鐘は、詳しく研究するために London へ送られることで作品より姿を消してしまう。Paul の引上げられたその鐘への情熱は、Dora のそれを引上げることへの情熱とそれからの解放を思う時、二人のくいちがいを暗示していて皮肉ではあるが、伝説の鐘が突然立消えてしまった感はまぬがれない。

この作品に於ては、人間関係はあまり謎解きめいた展開はみせない。その意味では最も技巧の凝されている *A Severed Head* はさておくとして、*Under the Net* や *The Flight From the Enchanter* と比べてみても、次々と思いがけぬ人と人との結びつきが明らかにされていくという面白さでは、この作品の方が劣っている。ただ、いわくありげな Michael と Nick の昔の関係が明らかにされることや、Catherine の思いがけない Michael への思慕の表現などに、Murdoch らしい筆使いがみられるのみである。この作品では、人間関係の面白さには作者の関心は向けられず、Dora と Michael を中心にして人間そのものを描くことに焦点が当てられている。<sup>2)</sup> それでは、一体どのような人物が描きだされているのだろうか。

Frederick R. Karl は、この作品を評して、Dora が喜劇的人物になり切っていないことを欠陥としてあげている。<sup>3)</sup> 成程、最初に登場する Dora は、

1) “the bell” の象徴性に関しては、James Gindin の論文があるが、あまりに多くの意味をみすぎているように思われる。cf. James Gindin, *Postwar British Fiction*, Univ. of California Press, 1963, p. 179.

2) 他の作品の中では *The Sandcastle* に同じような傾向がみられる。

3) F. R. Karl, *The Contemporary English Novel*, New York, The Noonday Press, p. 263.

読者の笑いを誘う人物として描かれていることは明らかである。たとえば、Imber へ向う汽車の中で床の上をはっている蝶をみて、乗客に踏みつぶされることを心配して救いあげて手に持っていたため、夫に頼まれていた大切な書類の入ったスーツケースと帽子を置き忘れて汽車を降りてしまったり、そのくせ夫の姿をみるとその方に気をとられて、蝶を手を持っていることさえ忘れてしまっている。夫に何を手に持っているのだときかれた時の Dora の様子は次のようである。

Dora had forgotten about the butterfly. She opened her hands now, holding the wrists together and opening the palms like a flower. The brilliantly coloured butterfly fluttered across the sunlit platform and flew away into the distance. There was a moment's surprised silence.

“You are full of novelties,” said Paul.<sup>1)</sup>

妻の帰って来たのを内心では喜びながらも、出迎えるなりうんざりしている Paul の様子が目にみえるようである。<sup>2)</sup> そのあくる日には、そのスーツケースを駅まで受取りに出かけて、帰り道で立寄った店に又それを置き忘れ、しかも近道をしようとして道に迷って、へとへとになったところで Michael と出会いやつのことで Imber に帰りつくというエピソードもあり、Dora には、多分に喜劇的人物としての要素がみられることは明らかである。しかし、作者は第一章に於て、すでにそのような面とあわせて、他の一面をも描いているのである。

The reality of the scene she was about to enter unfolded before her in rows of faces arrayed in judgment; and it seemed to Dora

1) Iris Murdoch, *The Bell*, London, Chatto & Windus, 1965, p. 25. 以下この作品の場合頁のみしるす。

2) 美しい蝶が空に飛び去っていくことは、Dora のその後の姿と二重映しになっていると考えられる。

that the accusation which she had been prepared to receive from Paul would now be directed against her by every member of the already hateful community. She closed her eyes in indignation and distress. Why had she not thought of this? She was stupid and could see only one thing at a time. Paul had become a multitude. (p. 22)

このように、Dora 自身他の人に批判的にみられる自分の姿を自覚しているのである。決して自分に満足しているのではなく、他人に評価されることを極度に恐れている。それは、自分に対する自信のなさのためであると同時に、Dora が真の意味での自由を求めているからであろう。

Paul と結婚したのも、彼の落着きと上品な生活振りにひかれて、彼と一緒にすることで自分も洗練された女になれるものと信じたからである。しかし、しばらくすると結婚生活と自分が心の中で求めているものとの間に、ギャップを感じる。Dora が、夫の許を逃げだした直接の原因は、夫が恐ろしかったからである。Dora は自分が、彼に威されて美術品のように彼の所有物となり、彼の中に“organize”されることに対して、恐怖を感じたのである。だから、Imber に滞在する夫の許へ帰って来た夜、床に入る前に鏡に映る自分の姿を確かめなくてはならなかったのは、夫の所有物としてではない自分独自の存在を確認したかったからに他ならない。だからこそ、罨にかかった小鳥をみて Paul を苦笑させる程興奮してしまったり、Catherine が除幕式の日に修道女になり、尼僧院に入ることを聞いて、Dora はまるで自分が牢獄に押込められるような衝撃を受けるのである。これらの Dora の反応は、何ものにも“organize”されないで、未熟なりに自分自身に誠実に生きていこうとする願望のあらわれであろう。既成道徳の世界に安住する夫の Paul の目からみると、Dora は奔放な女で突飛な行動をするようにしか映らないが、彼女が大切にしているのは、既成の道徳律ではなく自分自身に忠実に又彼女なりに誠実に生きていくことなのである。

しかし、湖に沈んでいる鐘の話を Toby にきくまでの Dora は、目的が

定まらず自分でもどうしたらよいのかわからず、いらいらして暮している姿がくり返し描かれている。それが他人には衝動的な女に映るのである。その Dora のもどかしい気持は、次の動作によくあらわれている。

She went again to the window, and an idea occurred to her of trying somehow to break into the idle motionless scene. She thought that if she threw something very hard out of the window it would fall into the lake with a splash and disturb the reflections. She opened the window wider and looked for something to throw. The match-box was not heavy enough. She took her lipstick, and leaning well back, hurled it out. It vanished, falling presumably far short of the lake, somewhere in the long grass. Dora felt almost tearful. (pp. 183—4)

この例文からわかるように、Dora の場合には、その時の彼女の心理状態と行動とが一致して描かれているわけである。だから伝説の鐘をひきあげるとは、Dora にとっては、“A sort of rite of power and liberation” (p. 213) であったのである。

伝説の鐘をひきあげて、現実存在するその鐘にぶつかって行くことで、Dora は Paul への恐怖心に象徴される自分を“organize”し“enclose”しようとするものから、全身で戦って逃れようとする。数世紀の間、湖底で眠り続けて来た鐘を引上げ、それを打ちならすことで、それまで自分を縛っていたものから彼女が自由になることを象徴していると解せよう。それまで積極的に問題を解決しようとせずに逃げてばかりいた Dora が、初めて real なものに体をもってあたって行ったのである。Dora は、ここではっきりと目覚めたといえるだろう。

その後の Dora の変化は著しい。引上げられた鐘の研究のため Paul が Dora を荷物の後仕末に残して帰ってしまうと、彼女はそれまでと打って変って、Imber でまるで水を得た魚のように活動をはじめ。ボートに乗ることさえこわがる程に水を恐れていた Dora が、独力でなんとか泳げるように

なり、それ迄は家事に消極的でひまを持余していた彼女が進んで家事に精をだし、菜園の後仕末に残っている **Michael** の有能なる秘書役をつとめる。事件のあと水泳をものにしたことでもわかるように、今まですべてに受身でただ焦立ち突飛な行動をしていた **Dora** が、積極的に自分の生きる道を見つめようと努力するのである。**Michael** の親切な助言もあり、夫の許へは帰らず友達 **Sally** と共同生活をして教師をしながらもう一度絵の勉強をすることに決める。**Dora** は六週間程前に、蝶に手にして汽車を降りた時の彼女ではなく、未来をむいて自信をもって生きていこうとする人間になっている。

前半に於ては、**Dora** を読者の笑いを誘う人物として描いていた作者が、後半に於ては、彼女の成長を描いているのであって、作者が彼女を喜劇的人物として描こうとしたとは考えられないのである。私には何よりも **Dora** に対する作者の愛情が感じられるのである。それは、作者が最後に於て **Dora** の身のふり方を書かずにはいられなかったことから明らかである。このように最後まで作中人物に暖い目を注いでいるのは、**Murdoch** の作品に於ては珍しいことである。たとえば、*The Unicorn* の中に出てくる家庭教師の **Marian** は、話相手をつとめていた女主人 **Hannah** にひかれて、なんとか力になりたいと滞在を長びかせているうちに、恋人を失い、しかも、**Hannah** の自殺をも妨ぐことができず帰っていくのである。全てを失った **Marian** の姿が描かれているのみである。だから、前半の **Dora** の姿については、喜劇的というより、むしろ心に求めるものを持ちながらどうすればよいのか方法がわからず、そのため衝動的に生きざるを得ない官能的な女のイメージを描いたものであり、作品の後半では、我々の脳裡に **Imber** の悲劇を糧にして美事に生き残った彼女の姿が刻みつけられるのである。

別れの日、汽車の時間の都合で先に **Michael** を送り出して、**Imber Court** に一人引返して、湖にボートを浮べる **Dora** には、あの頼りなげな劣等感に苦しめられた姿はなく、**Paul** の許へも、**Noel** の許へも帰らず、**Michael** に対する淡い想いを胸にひめて、孤独に堪えて、自分自身に誠実に生きていこ



うとするその姿は感動的でさえある。Frederick R. Karl の評は的を射ないものであることは、明らかであろう。

それでは、もう一人の重要な人物 Michael とは、どのような人物なのであろう。Frederick R. Karl は、Michael を評して悲劇的人物になり切っていないと述べている。<sup>1)</sup> 果してそうであろうか。検討してみる必要がある。Michael は、Cambridge 出のインテリであり、行動人というより思索にふける人である。その意味で、Dora とは対照的な人物である。彼が大学を卒業して間もない頃、牧師になることを人生の目標にしてその準備の勉強をしながら教師をしていた時、生徒の一人 Nick と親しくなり、多少同性愛をおもわせるような関係ができる。Nick がそのことを校長に告白したため、事実以上に誤解されて、教師の職を追われ牧師になる望みすら無残に打ちくだかれるのである。その後十年余りたち、Imber の指導者になり再び牧師になることを考え始めた時、又しても Toby との間に同じような誤ちを犯しそうになる。そのことが明るみにでたために、Toby が理想的な生活であると憧れた Imber も発足以来一年程で解散へと追い込まれるのである。除幕式の失敗と、それに引続いて起った Nick の自殺を契機として、Michael は単に牧師になる夢が再びこわされたばかりでなく、神への信仰に生き聖職につくことこそ自分の人生の目標であると思込んでいたことが“romantic imagination” (p. 312) であったことを悟るのである。神への信仰だと思っていたのは、実は全く虚像であり、彼に残ったのは、益々つる Nick に対する慕情でしかないのである。

一方、James は、Michael とは対照的な人物で、迷うことのない決断力のある男性的な人間として描かれている。彼にとっては、物事の善悪は、はっきり決定したものであり、その判断に迷うなどということは考えられない。牧師として尊敬され、その手腕は高く評価されている。しかし、Dora の夫の Paul と同じく James も既成道徳の支配する世界に住む独善的な人間と

1) F. R. Karl, *op cit.*, p. 203.

して描かれていて、作者の暖い目はむしろ人生の挫折者である Michael に注がれているように思われる。それは、Michael を非常にやさしく、おもいやりのある人間として描き、決して同性愛の故にグロテスクな人間に描いたりしていないことから、うかがえる。他人に対しておもいやりがあるために、Nick のことや Toby のことで苦悩する彼の内面描写を、丁度 George Eliot が *The Mill on the Floss* の中で Philip のことや Stephen のことで苦しむ Maggie の内面描写を行ったのと同じように、作者は綿密に辿っている。それに対して Dora の場合には、口紅を窓から投げずにはいられなかったことから明らかなように、常に内面の状態と行動とを結びつけて描いている。Michael は、誤ちを犯すことを恐れるため行動をおこさない。内面に於ける葛藤に疲れはてるのみである。このような彼の姿を描くことで行動的な Dora の姿が生きてくるのだと思われる。人間としてみた時、Michael は、いかにもスケールが小さいことは認められようが、この作品に於て Michael に偉大なる人生の悲劇をみようとするのはどうであろうか。最後に一人ボートをこぐ Dora の姿に感動する人にとっては、Michael の挫折は、まことに痛ましいものである。作者は、Michael の創造にも、十分成功していると思われるのである。

この作品に於て、Murdoch は悲劇を描こうとしたのでも、又喜劇を描こうとしたのでもない。様々に不幸な孤独な人間の姿を描きだしているのである。Paul は世間的にみれば、立派な学者であり、Dora に対して彼なりの愛情をいだいているのだが、それは独善的なものである。優しい心を持っていたため挫折していった Michael、宗教に救いを見出し得ず狂ってしまった Catherine、豊かな才能を持ちながら身をもちくずし自殺した Nick など、Dora をも含めてみな孤独であり不幸である。その中で人生の真実に目覚めるのは、奔放に生きるようにみえた Dora なのである。ここに、Murdoch の人生に対する態度が雄弁に物語られているといえよう。

次に引用するのは、Murdoch の *Sartre, Romantic Rationalist* の序文の中の一節である。この中に、彼女の小説に対する考え方が、きわめてよくあら

われていると思われる。

The novelist proper is, in his way, a sort of phenomenologist. He has always implicitly understood what the philosopher has grasped less clearly, that human reason is not single unitary gadget the nature of which could be discovered once for all. The novelist has had his eye fixed on what we do, and not on what we ought to do or must be presumed to do. He has as a natural gift that blessed freedom from rationalism which the academic thinker achieves, if at all, by a precarious discipline. He has always been, what the very latest philosophers claim to be, a describer rather than an explainer; and in consequence he has often anticipated the philosophers' discoveries.<sup>1)</sup>

Murdoch は、小説を人間存在や人間関係の本質をさぐる一種の現象学であると考えている。小説家の任務は、説明することではなく“describe”することによって、人生の本質に迫ることである。彼女が哲学ばかりでなく、政治にも強い関心をもっていることは、*Sartre, Romantic Rationalist*, や *Against Dryness*<sup>2)</sup> よりうかがえるが、小説の中では、現代の世界情勢とは切りはなされた隔離された世界の中で生きる人間に焦点をあてて描くことで、現代に生きる人間の本質を浮き彫りにしようとしている。しかも、この作品に於ては、技巧に溺れることなく、生きた人間を描きだすことに努力を集中し、それが美事に成功して、*Dora* を中心に様々の人間模様を描きだし、技巧的には、この作品より完成度の高い後の作品より、魅力ある彼女の世界を作りだしているのだと思われる。

1) Iris Murdoch, *Sartre, Romantic Rationalist*, New Heaven, Yale University Press, 1965, ix—x.

2) *Encounter*, vol. XVI